2020年6月22日

秘話・切手になった 関西汽船の 別府航路の船

～ 日本C&F学会　さんふらわ での旅行を記念して ～

個人会員　　渡邊 八郎（昭雄）

日本切手を発行する旧・逓信省時代から民営化された㈱日本郵便に至る今も、日本切手では、個人や私企業の建物やその製品はその図柄に採用しないことが内規になっている(1)。ところがその例外的とも思われる珍しい切手が、日本に二つあることを、あなたはご存知だろうか。その第一は、日本アルプスの上空を飛ぶダグラスDC-2機の機影（2円の募金が付加された愛国切手3種、別掲）。第二が、ありし日の関西汽船の別府航路の汽船の写った、通称・別府観光切手である（下図）。たかが切手、と言ってしまえばそれまでだが、この別府観光切手が発行された裏には、別府市当局と関西汽船、なかんずく当時の神田関西汽船社長の執念とも云える働き掛けがあったことは、世にあまり知られていない。私はひょんなことで、歴史の中に埋もれてしまいそうなその裏話を知る立場に育ったので、神田社長とその御曹司の神田郁夫先生を供養する思いにも駆られて、私が西方浄土への船旅に出掛ける前にこの一文を記す次第である。

別府観光、 Tourist Issues, Beppu
（別府港と高崎山）日本郵便、1949.3.10

永かった 太平洋戦争 がやっと終って

かって日本はアメリカと戦争をしたことがあった。戦争の初期には、日本軍はシナ（中国）や東南アジア、南太平洋方面に戦線を拡げたが、やがて体勢を立て直したアメリカを中心とした連合国軍の総反撃を受けて、その末期には広島と長崎に原爆攻撃を受けて、日本中は焦土と化し1945年にたまらず降伏した。その焼跡から這い出して、日本人があえぎあえぎ書いたのが、第9条を中格とした日本の新憲法であった。だから、その第9条はめったなことでは改正してはいけないのではないか、と私は思っている。
さて、日本は神国だから絶対に負けない、と教えられて育った私には、日本の降伏はショックだったに違いなかった筈だが、これで腹一杯にご飯が食べられる時代が来る、と兄達から聞いいて、当時小学生だった私は、アアやっぱり最後には神風が吹いたんだと、やや明るい気持ちになったことを良く覚えている。思えば、その頃から私は楽天家だったらしい。
しかしそう思ったのは私だけでは無くて、壊滅状態だった日本政府も、外人観光客の日本への誘致に動き始めた。こうした中で、戦後間もない 1947年6月24日（奇しくもこの　さんふらわ号旅行の最終日の71年前 !）に開催された逓信文化委員会では、当面の切手発行計画として、日本全国の名勝地を百か所ほど選んで切手の図柄とする、いわゆる「名勝地切手」の企画が採用された。
この別府観光切手は、実はその一環として発行されたのである。

田舎の一温泉から、日本を代表する別府温泉に

神田社長は戦前から、関西汽船を貨物船を運航するだけの船会社に終わらせない、と考えておられたらしい。同僚船会社が合併を繰り返し、貨物の奪い合いをしているのをよそに、早い頃から大阪港から船内一泊程度で行ける、西方の観光地を物色しておられた、と御曹司の郁夫先生は仰っていた。その物色地の一つに別府温泉があり、なんとかして別府温泉を大阪地方

の富裕層に知らせたいと思っていた別府市の想いが一致して、以来別府温泉と関西汽船は、車の両輪のようになって、当時未だ観光産業なんて言葉が無かった時代に、観光事業に乗り出されたのに違いない。
だが貨物輸送と違って、人の運賃はそう高くは取れない。人の運賃は鉄道運賃との競争で決まる。そこで浮上してきたのが、大阪地方の新婚客を別府温泉に送りこむ、という策だった。当時大阪地方で結婚式を挙げた新婚客カップルは、せいぜい有馬温泉か白浜温泉に出掛けるのが常だった。同じ温泉でも、船に一泊して別府温泉へ、そして時間的に許されるのなら、更に九州旅行に足が伸ばせる・・・。こうして関西汽船は、新婚旅行は汽船で九州へ、という路線を確立していったのである。

別府観光切手の発行に協力した 別府温泉 と関西汽船

別府市は、逓信省で別府温泉の切手の発行が決まると、切手制作の為の費用として30万円を予算化して、市の商工観光課を窓口にして、原画制作に協力した。原画は油絵で描くことに始めから決まっていて、中村研一画伯が選ばれた。その中村画伯は、時の洋画界の大物で、普通なら切手の原画など手がける画家ではなかったが、中村画伯はその前に従軍画家として幾つかの戦争賛美とも受け取られる画を残していたので、戦後は暫く画界で干されていた。で、この切手の原画製作を自分の絶好の追放解除の機会と受け止めて、原画製作を引き受けたらしい。別府市の希望で初めは高崎山だけを描いたが、それでは熱海と間違いかねないと、逓信省側が文句を付けた。そこで、待っていましたとばかり神田社長がしゃしゃり出て、高崎山の前に自社の別府航路の観光船を浮かべる事を提案した。しかし切手に関西汽船の観光船は使えないので、2本マストの間に2本の煙突を描いて貰い「ハイ、これは関西汽船の船では御座いません」と言い逃れをしたのだそうだ。こうして、逓信省側からみたらあくまで架空の船と見えるが、関西人が見ると一目でアリャ関西汽船の観光船だと判る、まるで関西汽船の宣伝切手みたいな切手が全国の郵便局から売りだされることになったのである。

1949年(昭和27年)3月10日朝9時、別府観光の切手発売

記念すべきその切手は、私が中学2年生から3年生に上るその時に日本全国の郵便局から一斉に売り出された。私の通っていた甲陽中学では、学校は既に春休みに入っていたが、新3年B組の生徒の大半は登校していて、神田郁夫先生と山県・中学理事長を囲んで、私が西宮郵便局からその記念切手を買って帰ってくるのを、今か今かと待っていた。山県理事長は旧・辰馬汽船の社長で、新制・甲陽学院中等部の理事長を兼勤しておられたが、船の業界仲間の関西汽船の神田社長の御曹司にも目を付けて、丁度京大を出たばかりの郁夫さんを国語教師として新設の中学に迎えた。その為、兄貴みたいな年頃の郁夫先生のことを、我々悪ガキは「関西汽船」とあだ名を付けて呼んでいた。(山県理事長は関西学院とも親しい関係があり、新制・甲陽中学の発足時には、関西学院に倣って甲陽学院・中等部と称していた。)
私の持ち帰った切手をみて、皆は ヤッター と歓声を挙げた。煙突は1本余計だが、関西人なら誰が見てもこれは別府航路の船と判る。
これはその後判った余計なことだが、西宮郵便局でその切手を買うとき、私は切手シートの中から一番綺麗に印刷されている切手片(四方のミシン目の真ん中に図柄が印刷されている切手片のこと)を選んで買ってきた。でも戦後間もなくの印刷技術では、図柄の端がミシン目に掛っている切手(別掲)も混じっており、今や切手収集家の間では、その印刷ミスの切手の方が珍重されるのに、と後で知らされてガッカリしたものである。

観光船の凋落と、それに代わるフェリー事業の登場

別府航路は誰の目から見ても成功だった。その上に神田先生は、生徒の進言に応えて、父の社長に修学旅行専用船なるものをも提案した。中学生向けには、大阪・神戸港から小豆島へ。高校生向けには別府航路と、更に九州バス旅行に。これは男子校と女子高を組合わせて乗船させるのがミソだった。つまり、男子校の甲陽生と、スカートの丈の寸法にも規則のあるくらい日頃の身だしなみや男女交際にもうるさい甲南女子校生とが、数日であるが船内一緒に過ごして旅を続けるのである。先生や女子校の父兄は気が気でないが、生徒にとってはこれほど楽しいことはない。これも大成功して、後には修学旅旅行専用定期船も就航した。神田社長はこれに気を良くして、別府に続いて長崎、宮崎方面への配船も検討した。私が高校時代の事だったが、宮崎交通㈱へはお供した覚えがある。しかし好事 魔多し の例えとうり、そのとき同業他社はフェリー事業への転身を試みていたのである。観光事業への深入りが原因して、結果的に関西汽船はフェリー事業への転向が遅れて、神田社長も責任を取って退任し、神田郁夫先生もシュウト教員にイビられて甲陽中学を去った。山県理事長も政界に去った。厚生大臣として海員保険制度の仕上げをする為に、と私は聞いている。
そんな訳で私にとっては、この別府航路の観光船の2種の切手は、今は亡き 関西汽船 の墓標のようにも見えるのである。

(1) その代りという訳ではないが㈱日本郵便は、個人や各企業団体が思い思いの図柄の切手をある一定の制限のもとに自由に発行できる「フレーム切手」の発行サービスを行っている。しかしこのフレーム切手は、切手カタログには収録されないのが普通である。

(2) 本文中の、旧・逓信省内でのやり取りは、自らを 郵便学者 と名乗られる 内藤陽介 氏のブログから引用させて戴いた。

(3) 日本アルプスの上空を飛ぶ DC-2機 の切手　　図柄部分がミシン目にかかる製作ミスの切手

⇐ 愛国切手、 Patriotic Aviation Fund
日本郵便、1937.6.1